

今月の一言 運輸部門からの CO₂ 排出量は 2001 年をピークに若干ではあるが減少しています。90 年代後半には 1 割強伸びていた自家用自動車部門で減少に転じたからです。01 年からの自動車グリーン税制の効果とってよいと考えます。(吉田康之)

Topics

- 安澤前研究員が担当として、省エネのみならず緑化屋根や環境学習など地域と連携した環境改善に取り組んだ「かごしま環境未来館」が、第 03 回サステナブル建築賞(主催 財団法人建築環境・省エネルギー機構)審査委員会奨励賞を受賞しました。
- 3月24日に開催する第27回NSRI都市・環境フォーラムは、佐藤滋氏(早稲田大学理工学術院教授 都市・地域研究所所長 日本建築学会会長)によるご講演「まちづくり市民事業の可能性」です。詳細は <http://www1k.mesh.ne.jp/toshikei/>まで。

持続可能な地域モビリティの確保

～ 笑顔を生み出す交通への取り組み ～

少子高齢化、都市の縮退など都市を取り巻く状況が大きく変化をしている中で、地方都市の生活を支える、特に高齢者の生活を支える交通がどのような問題を抱えており、今後、さらに高齢化が進む中で、どう考えれば良いかについて、以下に示したい。

1. 生活の足が消える

我が国では、バス事業者、鉄道事業者などの交通事業者が、独立採算制の原則のもとで、地域の移動を担っている一方で、採算性が低い路線を中心に、バス路線、鉄道路線の廃止が進みつつあります。このことは、自動車免許を持たない、特に一人で生活している高齢者にとっては、外出の手段が無くなることを意味しており、さらに、農協、郵便局、病院などの身近で日常生活に必要な施設の統廃合などで、“いつも行っていた必要な場所”が遠くなるとともに、そこまでの足が消えることを意味しています。また、見落としがちですが、中学生、高校生も、学校の統廃合で、学校が遠くなるとともに、そこまでの通学手段が無くなることにもなります。

人口 10 万人未満の都市の 65 歳以上の高齢者は、平成 17 年で 1,000 万人であり、そのうち、移動に際してなんらかの問題がある人の比率を 20%とすると、その数は 200 万人となります。すべての人がバス利用者ではありませんが、潜在的な需要と捉えると決して小さな値ではないと言えます。

2. 新たな局面をむかえている地域モビリティ

- それでは、地域の交通は衰退をしていくのか？
このような中で、新たな取り組みがいくつか注目されており、それらの共通点をまとめてみると、
- 赤字バス路線の維持を目的とした補助から、使ってもらえるバス路線に変革。
 - 交通事業者に頼っていた地域の足を行政が自ら考え、自ら取り組む。
 - 地域住民が主体となり“身の丈にあった”取り組みを進める。

それらの詳細はここで示すことはできませんが、その一部を簡単に紹介します。

【上限 200 円のバス(京都府京丹後市)】

～市内なら、上限 200 円の運賃に設定することで、利用者が増加し、行政の補助負担額も約 6 割に減少～

“700 円の運賃で 2 人しか乗らないよりも、200 円で 7 人に乗ってもらおう”という行政担当者の言葉が示すように、バス路線の維持だけを目的としたバス路線への行政補助から、使ってもらえるバスに変えるという考えのもとに、大胆な変革を行っており、結果的にみんなで育てるバスに転換した事例です。

【路線バスから乗合タクシーへ(熊本県菊池市)】

～路線バスの撤退を機会に、身の丈にあった新たな交通システムを導入～

市内の山間部の住民の足を確保するために、バスが入れない集落もサービスできる、予約制のタクシーを安く使えるよう行政が補助を行う交通体系を構築した事例です。



利用者で賑わうバス社内
(資料提供:京丹後市)



あいのりタクシーと利用者
(資料提供:菊池市)

3. 地域の生活の質を支える足の確保

先の事例は、利用者の増加、補助金の削減などを達成した例でもありますが、最も大切なことは、単なる移動手段の確保ではなく、地域で生活する人を笑顔にし、生活の質を維持・向上していることです。かつての日英辞典には、「交通」の訳として、「Transport」だけでなく「Communication」, 「Correspondence(関係性)」が含まれていたそうです。いま、また、このような意味を捉えなおす時期ではないかと考えます。
(児玉 健)

定期配信をご希望の方

定期配信を御希望の方は、下記メールアドレスまで。
(chihiro.kimura@nikken.co.jp 担当: 木村千博)

編集後記

訳者あとがきの面白さで翻訳書を買った山形浩生。「翻訳者の序文」を書いて名をあげたガヤトリ・スピヴァク。編集後記の順番が回ってくるたびに、彼女らの本への敬意を感じます。(F)